

小学校

平成 9 年 度

教育研究員研究報告書

道 徳

東京都教育委員会

平成9年度

教育研究員名簿

第1分科会

地区名	学校名	氏名
新宿	西新宿小	石田 かほる
大田	仲六郷小	北条 美沙子
杉並	東田小	万谷 由美子

地区名	学校名	氏名
葛飾	住吉小	◎近藤 浩之
稲城	稲城第六小	◇岡田 一広
武蔵野	井之頭小	○荒巻 茂行

第2分科会

地区名	学校名	氏名
中央	佃島小	大家 幸栄
江東	亀高小	相川 武司
北	赤羽小	◇矢部 澄子
板橋	舟渡小	○永見 美里
足立	入谷小	安川 朱美

地区名	学校名	氏名
江戸川	二之江小	川島 丈典
八王子	元木小	渡辺 一雄
小平	小平第九小	小川 順
保谷	保谷小	野村 なほみ

第3分科会

地区名	学校名	氏名
港	三光小	黒田 由紀子
墨田	第一寺島小	○加藤 茂
世田谷	弦巻小	安倍 威
中野	江古田小	◇山口 千香子
豊島	池袋第一小	兵頭 扶美枝

地区名	学校名	氏名
足立	湫江小	菅原 進
田無	西原小	山田 勝美
調布	第三小	山下 理恵
立川	幸小	小倉 勇

第4分科会

地区名	学校名	氏名
品川	大井第一小	大崎 誠
目黒	東山小	井上 正子
世田谷	世田谷小	○宮島 徹
練馬	関町小	中島 孝

地区名	学校名	氏名
八王子	第四小	川上 智賀子
日野	日野第五小	室住 秀樹
青梅	新町小	桐井 裕美
三鷹	第六小	◇板宮 光恵

◎全体世話人

○分科会世話人

◇分科会副世話人

担当 教育庁指導部初等教育指導課指導主事 清水道弘

研究主題 よりよく生きる力を育てる道徳授業

目 次

◇ 研究主題について	2
◇ 研究の概要	3
I 生きる喜びを知り、自他の生命を大切にしようとする心を育てる指導の工夫	4
1. 分科会テーマ設定の理由 (第1分科会)	
2. 児童の実態調査	
3. 生きる喜びを知り、自他の生命を大切にしようとする心を育てる指導の工夫	
4. 実践事例	
II 自己を見つめる心を育てる指導の工夫 (第2分科会)	9
1. 分科会テーマ設定の理由	
2. 児童の実態調査	
3. 自己を見つめる心を育てる指導の工夫	
4. 実践事例	
III 進んで友達とかかわり、互いに認め合う心を育てる指導の工夫	14
1. 分科会テーマ設定の理由 (第3分科会)	
2. 児童の実態調査	
3. 進んで友達とかかわり、互いに認め合う心を育てる指導の工夫	
4. 実践事例	
IV 社会のルールを大切にすることを育てる指導の工夫 (第4分科会)	19
1. 分科会テーマ設定の理由	
2. 児童の実態調査	
3. 社会のルールを大切にすることを育てる指導の工夫	
4. 実践事例	
◇ 研究の成果と今後の課題	24

＜ 概 要 ＞

本部会では、研究主題解明に当たり、学習指導要領に示された内容の四つの柱に基づいて分科会を構成し、授業研究を通して実証的に授業改善に取り組んだ。

研究の方向を、児童のよさや可能性を見出し、それを認め、伸ばすことによって児童が本来的にもっているよりよく生きようとする力の育成を図ってきた。

その結果、児童自らがよさに気づき、それを生かすことができるようにするためには、児童の自己表現活動と学習支援を中心とする指導の工夫が必要であることが分かった。

研究主題

よりよく生きる力を育てる道徳授業

○ 研究主題について

これからの社会は、情報化、国際化、高齢・少子化、価値観の多様化など急速な変化に直面し、21世紀を担う子どもたちをめぐる状況も厳しい時代になると予想される。このような社会に対応するため、今日子どもたちには、個性を見出し、自らにふさわしい生き方を選択していく「生きる力」を養うことが求められている。現在、子どもたちは、豊かな環境の中で健康で活発に育ち、伸び伸びと明るく学校生活を送っている。一人一人が柔軟で豊かな感性をもち、やさしさや思いやりなどの心を大切に育てている。しかし、一方で、いじめや登校拒否をはじめとした子どもたちの抱える心の問題は年々深刻化し、社会に適應できずに自分を見失う子どもが増えている。「ゆとり」のない生活、情報の氾濫、人間関係の希薄化や規範意識の低下など、社会の変化が生み出した問題が子どもの生活に大きく影響し、心の教育に影を落としていると考えられる。

このような状況の中でこれからの教育は、子どもたちに「生きる力」をはぐくむことを目指し、その礎とも言うべき生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、美しいものや自然に感動する心等の豊かな人間性の育成を目指し、「心の教育」を推進していくことが重要な課題となっている。本研究主題の「よりよく生きる力を育てる」は、まさに「心の教育」を具現化したものである。「よりよく生きる力」は日々の教育活動で育てていくことが大切であり、その中軸をなすのが道徳教育である。

人間は、本来人間としてよりよく生きたいという願いをもっている。「今日より明日」「今日の自分より明日の自分」といった自己実現を達成させたいという意欲をもって生活している。道徳教育とは、このような、よりよく生きたいという願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動である。「よりよく生きる力」を育てるためには、学校の全教育活動において行われる道徳教育を補充、深化、統合した道徳の時間の意義は大きく、その指導の充実は極めて大切である。

そこで、研究主題「よりよく生きる力を育てる道徳授業」に迫るため、本年度も道徳の指導内容の4つの視点からそれぞれの目指す児童像を掲げ、分科会ごとのテーマにそって研究を進めてきた。（「目指す児童像」「分科会テーマ」については別紙『研究概要』参照）

それぞれの分科会が目指す「心の教育」の視点は次のとおりである。

第1分科会 「自他の生命を大切にする心」（3の視点）

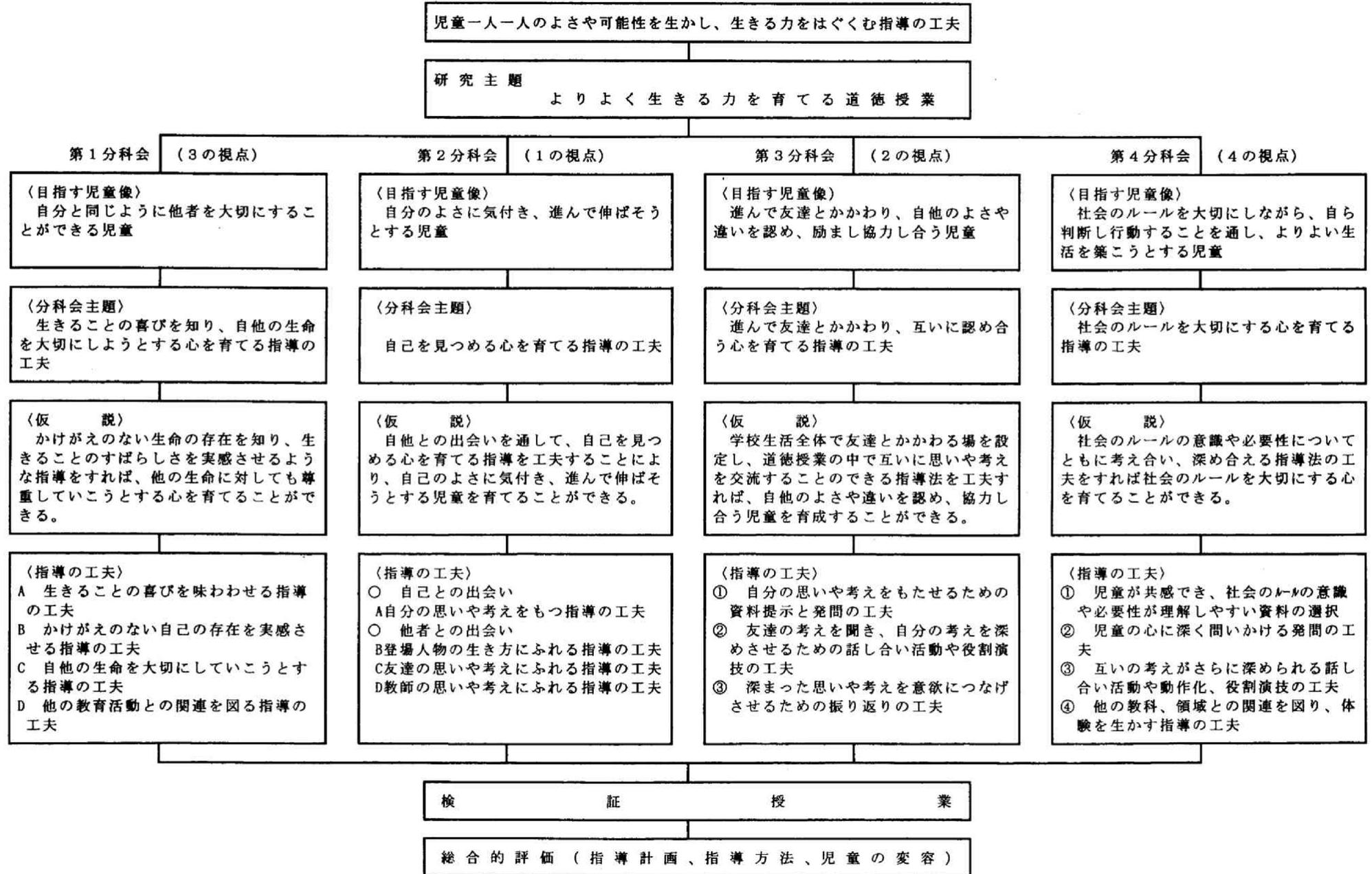
第2分科会 「自己を見つめる心」（1の視点）

第3分科会 「互いに認め合う心」（2の視点）

第4分科会 「社会のルールを大切にする心」（4の視点）

そして、これらの「心の教育」を追究するに当たり、授業研究を通し、分科会テーマに迫ることで、よりよく生きる力を育てたいと考えた。

研究の概要



I 生きる喜びを知り、自他の生命を大切にしようとする 心を育てる指導の工夫（第1分科会）

1 分科会テーマ設定の理由

科学技術の進歩や経済の発達是我们に物質的に豊かで快適な生活をもたらした。しかし、一方では自然環境の悪化を招き、機能面の便利さを追い求めるあまり人との触れ合いが減り、人間関係の希薄化を生み出してきている。また、価値観の多様化により、個人の生き方が多岐にわたるようになった。このような社会環境の急激な変化は、児童の生活にも様々な影響を及ぼしている。

児童の人権を軽視したいじめ問題や、以前として増加している不登校などの問題行動は、今や大きな社会問題となっている。また、児童はリセットボタンを押せば生き返ってしまうゲーム機を持ち、街には戦いもののゲームや人間の死までも過激に映し出す映像が氾濫している。生命軽視の風潮が蔓延しつつあるのではないだろうか。このような中、児童は生きていることへの実感をもちにくい状況にあると考える。

児童は本来、よりよくなりたい、よりよく生きたい、という願いをもってはいるものの、自己をあまり見つめていないのが実態である。また、様々な体験を通して生命や死を漠然と感じてはいるものの、そのことが生命のかけがえのなさや大切さを自覚するところまで至っていないことが実態調査の結果からもうかがえる。

そこで第1分科会では、道徳部会研究主題「よりよく生きる力を育てる道徳授業」の中の「よりよく生きる」について、「自分のよさや課題を自覚し、さらによさを伸長し、課題を解決しながら他者へも広げていくこと」ととらえた。

「よりよく生きる力」を育てるためには、何が大切なのであろうか。このことは、道徳教育の全価値項目にかかわってくることであるが、「すべての道徳性は、生命が大切にされてはじめて成り立つものである」と指導書にもあるように、『生命尊重』が極めて重要であると考えた。

以上のことから本分科会では、「かけがえのない生命の存在を知り、生きることのすばらしさを実感させるような指導をすれば、他の生命に対しても尊重していこうとする心を育てることができる」という仮説を立てた。この仮説を基に「意欲的に粘り強く取り組む児童」「自分と同じように他者を大切にすることができる児童」の育成を目指し、分科会研究主題を『生きる喜びを知り、自他の生命を大切にしようとする心を育てる指導の工夫』と設定した。

2 児童の実態調査

- (1) 調査のねらい 生命に対する児童の経験や意識を把握し、指導の工夫に役立てる。
- (2) 調査対象児童 調査対象児童は、都内41校の児童 1～6学年 合計1,208名
- (3) 方法 一部自由記述を含む選択肢法による質問紙調査を行った。内容は全学年共通とした。

(4) 結果と考察

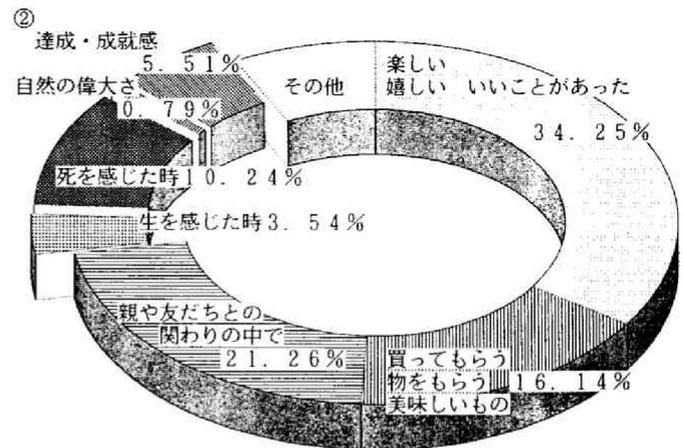
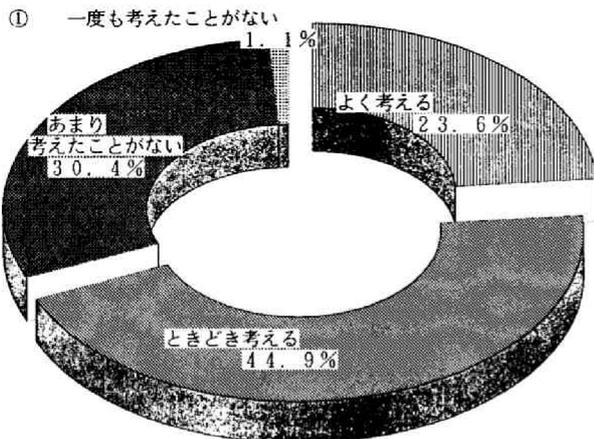
設問1 命をもっているものには、どんなものがありますか。

全学年に共通して得られた回答は、人間・動物・植物に大別できる。それ以外の回答で特徴的な傾向をあげると、低学年では、パソコン・バイオリン・プールなど身近な具体物により多くの児童が生命を感じている。また、高学年では、太陽・地球・星・自然などや知恵・思いやり・心など、自然の偉大さや抽象的な概念に生命を感じるようになる。このことから、児童は学年が上がるにしたがって、自然や人間の力を超えたものに生命を感じるようになることが分かった。

設問2 生き物は好きですか。

9割以上の児童が「大好き」「好き」と答えていることから、児童の心の中には、生き物に対する愛情があると考えられる。

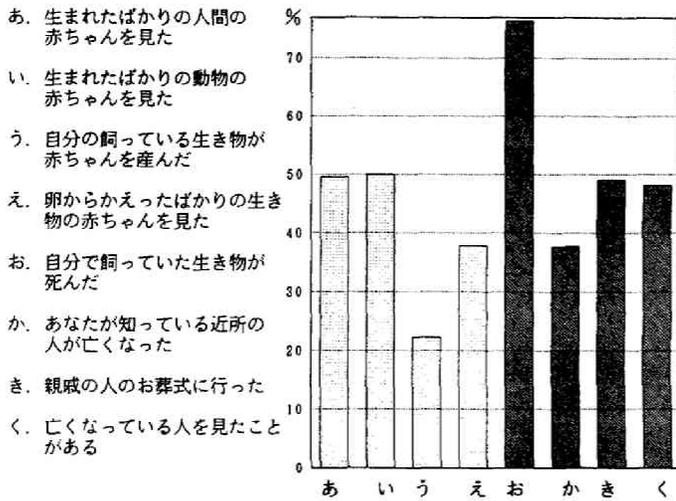
設問3 ①「生きていてよかった」と考えたことがありますか。
②それはどんな時ですか。（「よく考える」・「時々考える」）児童のみ回答



多くの児童が「生きていてよかった」と考えたことがあると回答している。また、「どんな時に考えたか」という質問に対しては、「楽しいとき」「うれしいとき」「物をもらったとき」「おいしいものを食べたとき」など、その場限りの快・楽を優先させた回答が大変多い。反面、実際に、生や死を感じたときに「生きていてよかった」と考える児童は2割に満たなかった。

このことから、児童は日常生活で「生きていてよかった」と考えることは多いが、深く生や死については、あまり考えていないことが分かった。そこで、生や死について深く考える機会や、話し合う機会を与えることが必要であると考えられる。

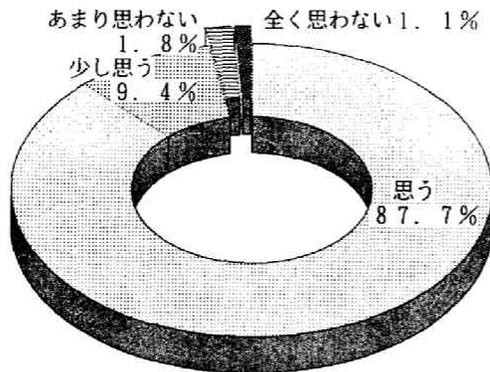
設問4 あなたは次のような経験がありますか。



自分の飼っていた生き物が死んだ体験を8割近くの児童がもっているが、生き物の生命誕生を目のあたりにしたことがある児童は少ない。また、人の誕生や死に接した体験をもっている児童は、全体の半数ほどしかいないことが分かった。

児童は、生まれた命がやがて死に至るという生命の自然の摂理を実感しにくくなっているのではないかと。このことから命には限りがあり、大切にしていかななくてはならないことを児童に気付かせる必要性を感じた。

設問5 人間の生命は大切だと思いますか。



全体の約9割の児童が、「生命は大切だと思う」と回答しているが、「あまり思わない」「全く思わない」児童が全学年に平均して3%近くいたことは深刻な問題を示している。「あまり思わない」「全く思わない」と回答した児童には、なぜ思わないか、生命より大切だと思うものは何なのかを問う必要性を感じた。

(5) まとめ

児童の生命観は、表面的・観念的なとらえ方が大半を占め、本質的なところでとらえている児童は少ないことが分かった。このことから児童には、生きる喜びを実感させると共に、自他の生命を大切にしていこうとする心を育てる指導の工夫をしていくことが重要であると考えた。

3 生きる喜びを知り、自他の生命を大切にしようとする心を育てる指導の工夫

第1分科会では、生きる喜びを知り、自他の生命を大切にしようとする心を育てる指導として、次の4点を工夫し、研究仮説の検証を目指した。

- A : 生きる喜びを味わわせる指導の工夫
- B : かけがえのない自己の存在を実感させる指導の工夫
- C : 自他の生命を大切にしていこうとする指導の工夫
- D : 他との教育活動と関連を図る指導の工夫

	主題に迫るための視点	具体的な手だて	A B C D
資料	・児童の興味・発達段階に応じた資料を準備する。	・資料の精選 ・自作、改作、抜粋	● ● ○ ● ● ○
事前 指導	・事前調査により価値にかかわる経験的なものを思い起こさせると共に、児童の実態を把握する。	・事前調査	○○○
導 入	・資料へ関心をもたせ、より共感させる。 ・ねらいとする道徳的価値に方向付ける。	・具体物の提示 ・アンケート調査結果の提示 ・V T R ・新聞の記事 ・児童の作品（作文、詩等） ・教師の説話 ・B G M	○○ ○○○ ○○ ○○ ○○○ ◎◎◎ ○
展 開	・資料中の人物の考え方、感じ方に共感させる。 ・発表や表現の場を通して、かけがえない生命について考えさせる。 ・自分の考えをはっきりさせることで主体的に授業に参加させる。	・資料提示の工夫（パネルシアター、ペーパーサート、紙芝居、V T R、録音テープ、O H P、O H C、一枚絵、場面絵） ・資料の分断 ・前日の資料配付 ・ディベート ・役割演技、動作化 ・心情図 ・価値の類型化 ・中心発問の工夫 ・板書の工夫 ・作品の紹介 ・マグネットの活用	◎○ ◎●● ○○● ◎●● ◎●● ◎◎◎ ○○○ ●●● ◎◎◎ ◎◎○ ○○○
	・一時間の授業を通し、感じたことや考えたことを整理し、まとめることでねらいとする価値について一人一人の児童に自覚させる。 ・自己を振り返り、生命を大切にする心情を高める。	・意図的指名、相互指名 ・ワークシートの活用 （ワークシートを交換しコメントを書き合う） ・価値の一般化 ・道徳ノートの活用	◎◎◎ ●●● ●●● ●●●
終 末	・自他の生命を大切にしようとする心情を高める。	・教師の説話 ・歌 ・ことわざ、格言 ・家族、友人、教師からの手紙 ・児童の作文 ・V T R ・B G M	●●●○ ●●◎ ●●● ●●●○ ●●● ●●● ●●●
事後 活動	・場面を見つけて支援し、よりよい生き方につなげていく。	（他の教科・領域との関連を図る）	●●●●

(● : かなり関係する ◎ : 関係する ○ : 少し関係する)

4 実践事例（第5学年）

- (1) 主題名 命の尊さ 3-(2) 生命尊重 資料名 「猛火のなかで」 学研 東京都版
 (2) ねらい 生命の大切さと、それが多くの人によって守られていることを知り、進んで他の生命を大切にしようとする心情を育てる。
 (3) 展開

	学習活動・主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1 アンケートの結果を提示する。	・道徳的価値に方向付ける。
展開	2 資料「猛火のなかで」を読んで話し合う。 ①工場の消火に努める人が、だんだん減っていったとき、龍太郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・自分だって家族のことが心配だ。 ・帰るか残るかどうしようか。 ・仲間ががんばっているのに、自分だけ逃げだすわけにはいかない。	・一枚絵を見せる。(関東大震災) ・資料の前段部分を読み聞かせる。 ・龍太郎の家族を思う気持ちと、責任感との狭間で、揺れる思いに共感させる。
前	②疲れて自分も船に逃れようとしたとき、また「助けて、助けて」と叫ぶ声が聞こえました。その時、龍太郎はどう思ったでしょうか。	
段	・助けにいったら、自分の命が危ない。 ・自分の命のほうが大切だ。 ・助けたいけど、もう無理だ。 ・何としてでも助けたい。 ・他の人も助かりたい。	・ディベート的に話し合わせる。 ・自分の命と他の人の命の間で、葛藤する龍太郎の心情に十分触れさせる。 ・資料の後段部分を読む。
後	3 授業の感想を書き、話し合う。 ③今日の時間に、思ったことや感じたことをワークシートに書きましょう。	・自分なりに感じたことをワークシートにまとめさせる。
終末	4 教師の説話を聞く。《飛行機事故で母を失った少女の言葉（新聞記事より）》	・生命の大切さ、かけがえのなさを感じさせる。

(4) 考察

- ・自分の命と他人の命に対する葛藤場面の話し合いにより、生命尊重の心情が深まった。

Ⅱ 自己を見つめる心を育てる指導の工夫（第2分科会）

1 分科会テーマ設定の理由

第2分科会では研究主題に迫るために「主として自分自身に関すること」＜自己の在り方を自分自身とのかかわりにおいてとらえ、望ましい自己の形成を図ること。＞という道徳の内容1の視点に立ち研究を進めることとした。

望ましい自己の形成は、自分自身のことを深く考えることを通して、自己のよさや持ち味を生かし、より積極的に力強く生きようとする意欲をもつことによって図ることができる。

そのような自己の形成を図ることができれば、かけがえのない自分の存在を実感し、よりよく生きる力の源になると考えた。よりよく生きる力の基盤は、自分自身にある。自分の中にあるよさを信じて、自分の意志でよりよい生き方に向かっていくことが、これから出会うさまざまなことを乗り越えるときの力となるのである。

そこで、「自己のよさに気づき、進んで伸ばそうとする児童」を目指し、第2分科会のテーマを「自己を見つめる心を育てる指導の工夫」と設定した。

自己のよさとは

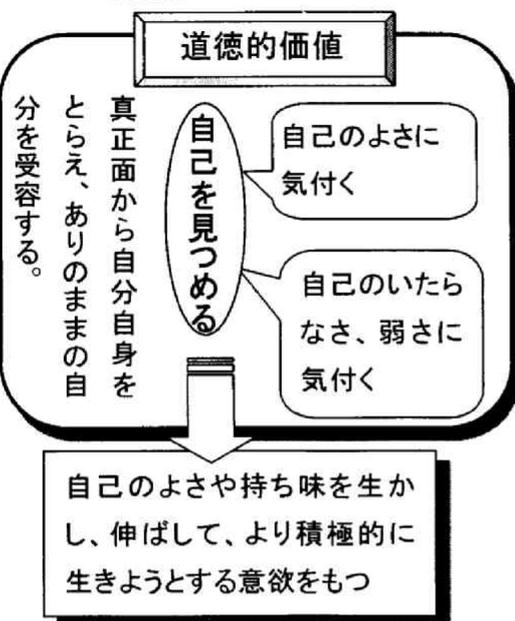
道徳の時間においては道徳性そのものとしてとらえる。

よさは、児童一人一人の中にあり、伸びようとするエネルギーを内包し、息づいている。



何らかの刺激により活発に動き出し伸びようとする。

自己を見つめるとは



児童一人一人が自己のよさに目を向けるためには、正しく「自己を見つめる」ことが大切である。

道徳の時間の中では、ある道徳的価値に照らし合わせて自己を見つめることになる。

そこで、次のように自己を見つめることがよりよく生きる力につながると考える。

- ・自己のよさや自分の中にあるまだ今は表出していないよさに気づき、伸ばそうする。
- ・自己のいたらなさ、弱さがわかり、それを克服し、よさに向かっていく力が自分の中にあることに気づき、よさを伸ばそうとする。

2 児童の意識調査

- (1) 目的 児童が自分のよさについてどのように認識し判断しているか、また、よさを伸ばし短所を改めようと努力しているのか、その傾向をとらえ、今後の指導の資料として役立てる。
- (2) 方法 選択肢による質問紙法を用い、都内9校の3～6学年、合計445名で実施した。内容はどの学年も共通とした。

1. あなたは、自分のよいところはどんなところだと思いますか。(4つ以内で選んでください。)

(単位は%)

	3年	4年	5年	6年
元気に遊ぶ	62	59	41	51
友達と仲よくできる	45	44	48	48
あいさつがよくできる	31	33	33	29
がんばりや	28	26	26	19
おもしろい、ひょうきん	25	26	35	17
勇気がある	24	18	14	6
物を大切にする	24	14	21	27
手伝いをよくする	21	28	14	14
きまりを守る	18	10	8	9
がまん強い	18	22	15	21
やさしい	14	17	20	16
責任感がある	14	7	11	5
くよくよしない	13	11	20	16
人の話をよく聞く	12	22	9	10
よく考えて工夫できる	5	12	7	8
正直である	4	11	10	8
積極的である	2	13	9	5
その他	3	2	4	1

その他(明るい)(活発)(がんこ)
(運動好き)(勉強が好き)
(努力するところ)
(面倒をよくみる)
(わがままを言わない)

全体的に、遊びやあいさつなど、友達などのかかわりから自分のよさを認識している児童が多い。良好な人間関係は自己のよさをとらえる重要な要素と考えられる。

また、「がんばりや」、「勇気がある」「積極的」など内面を問う項目は、学年を上がるごとに少なくなる。これは、成長とともに道徳的価値が高くなり、自己評価が厳しくなるためと考えられる。自己を見つめる目が育っているとも言えるであろう。

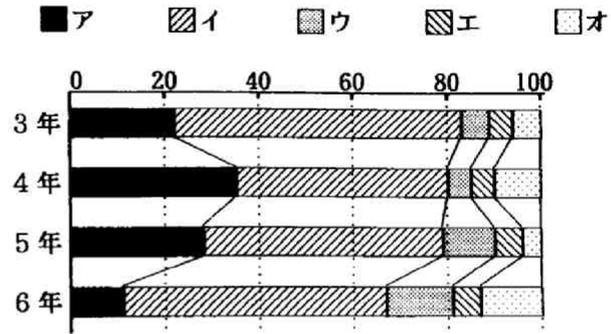
2. あなたは、自分のよいところをどうして気が付きましたか。(2つ以内)

	3年	4年	5年	6年
親、先生にほめられたり 友達に言われたりしたから	53	44	66	67
自分でやってできたり、分かったりして自信がついたから	42	54	51	36
相手が喜んでくれたから	37	30	37	20
本を読んだり、テレビを見たりして気がついたから	30	16	11	9
他の人とくらべて	14	13	12	24
その他	1	2	1	2

他者の励ましからよさに気付く児童が多い。また、自分の努力による達成感や成就感からよさを認識する児童も多いことから、自分自身による気付きも自己のよさをを見つける上で重要となる。教師による励まし、友達同士の認め合いの場、自分でやってみようとする体験の時間の確保等の指導の工夫が必要であると言える。

3. あなたは、自分のよいところをのばす努力をしていますか。

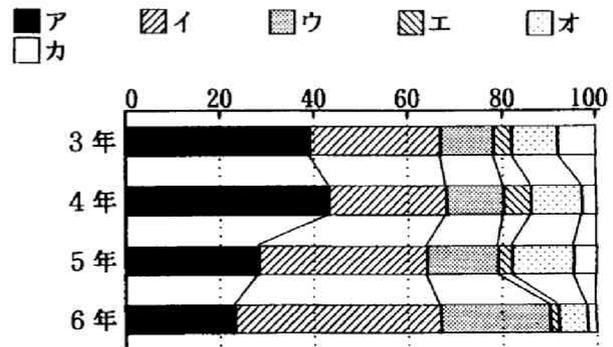
- ア いつも努力している
- イ 時々努力している
- ウ あまり努力していない
- エ ほとんど努力していない
- オ どのように努力すればいいのか分からない



どの学年の児童も、よいところを伸ばそうと前向きに努力している様子が見られる。ほめられたい、認められたいという気持ちの表れであろう。6年生でオが増えているのは、自分を見つめる目が育ち、どのように努力すればよさが伸びるかを具体的に悩んでいるものと考えられる。

4. あなたは、自分の直したいところについてどう思っていますか。

- ア いつも直そうと思っている
- イ 言われたとき直そうと思う
- ウ あまり考えたことがない
- エ そのうち直そうと思っている
- オ どうしたら直るか分からない
- カ あきらめている



ア、イを合わせて60%以上の児童が自分の短所を克服しようと意識していることが分かる。高学年では、アよりもイと答えた児童が多くなっているのは、他者への意識が強くなっていることと、直そうと思っているがなかなか直らないことへの自己評価が含まれていると考えられる。それ以外の児童についても、どのようにすれば克服できるのかを具体的な場面でとらえさせ、教師や友達など他者が援助したり励ましたりすることで、前向きに努力しようとする心情が育つと考える。

これらの調査から、児童はよさを伸ばし、課題を克服しようと前向きに努力していることが分かった。そして、新たな自己像の形成のためには、他者とのかかわりや自分自身の経験からの自信や意欲が重要であると考えられる。これらのことを踏まえ、第2分科会では自分を振り返る活動や、友達、教師、資料など他者とのかかわりを通して自己を見つめる心を育てる指導の工夫に取り組むこととした。

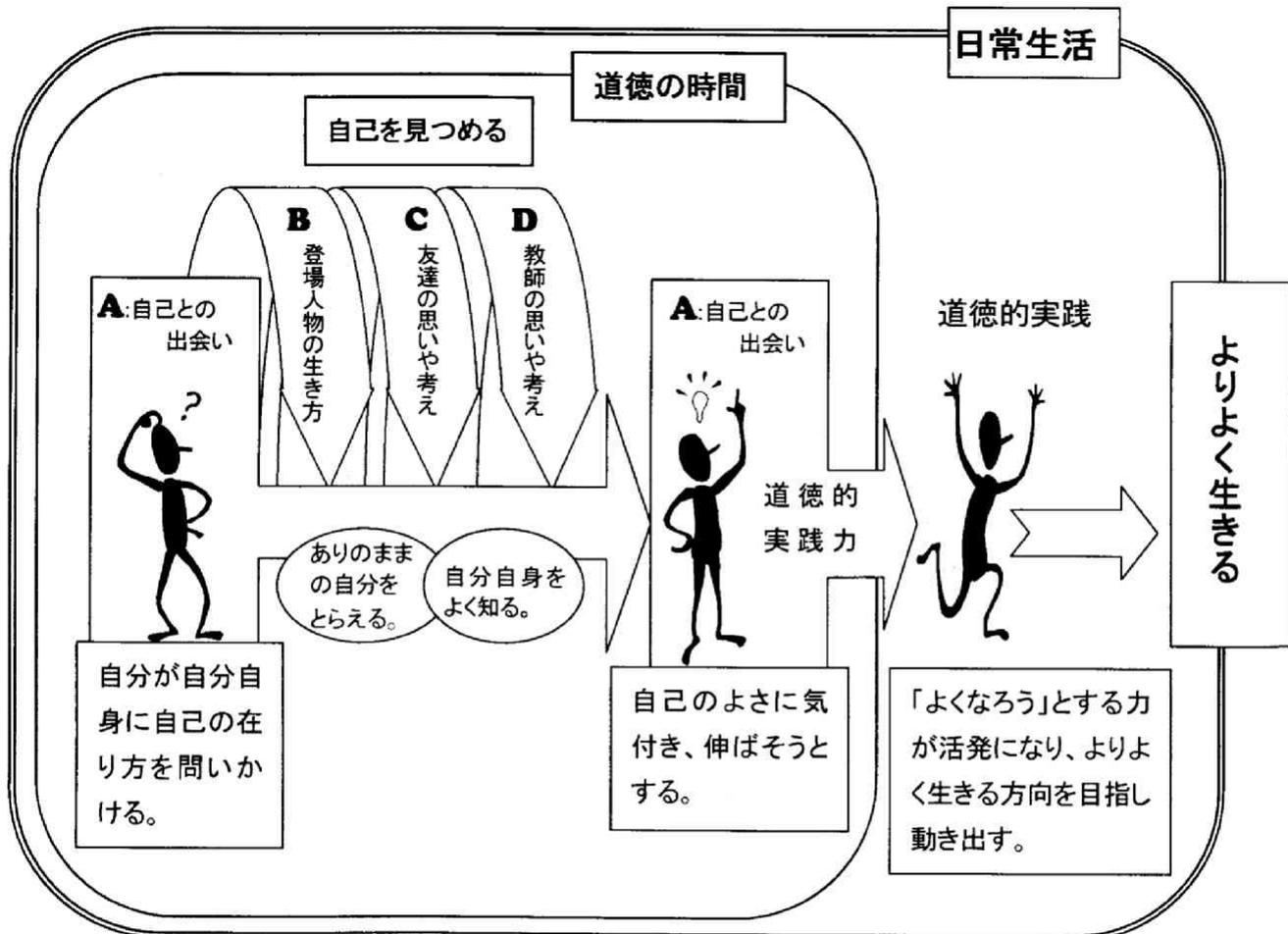
(調査項目は平成7年度東京都小学校道徳研究会の研究収録を参考に改訂した。本アンケート1で設定した17つの自分のよさは、調査側からみた児童の実態を踏まえたものであるが、児童のよさとは固定的なものでなく、教師や友達との日々のかかわりや児童自身の気付きなどによって流動的、発展的なものであると考えていきたい。)

3 自己を見つめる心を育てる指導の工夫

自己の在り方を自分自身とのかかわりを通して見つめる心（自己を見つめる心）を育てる指導を次のような **A B C D** の4つの視点で工夫することにより、自己のよさに気づき、自ら伸ばそうとする児童が育つと考えた。これら4つの視点の中で、**A**：「自己との出会い」により自分自身をとらえ、自己を見つめていくわけであるが、**A**は、「他者との出会い」**B C D**により高まり深まっていくと考え指導の工夫を行うこととした。学習活動や教師の働きかけは、これらの視点が相互に関連している。そこで、本研究では、児童の実態や授業のねらいや意図をもとに、4つの視点に対応した指導を工夫し活用していくこととした。

指導の工夫の視点 手だて	A ：自己との 出会い 自分の思いや考 えをもつ	B ：他者との 出会い 登場人物の生き 方に触れる	C ：他者との 出会い 友達の思いや考 えに触れる	D ：他者との 出会い 教師の思いや考 えに触れる
a ワークシートの活用	■	■	■	■
b 資料の選択・開発	■	■	■	■
c 資料提示の工夫	■	■	■	■
d 発問の吟味	■	■	■	■
e 役割演技・動作化	■	■	■	■
f 話し合い活動の工夫	■	■	■	■
g 教師のあたたかい働きかけ	■	■	■	■

■ 重点とする手だて ■■■■■ 関連する手だて



4 実践事例（6 学年）

- (1) 主題名 自分の特徴を知る 1-(6) 「向上心・個性伸長」
資料名 「私は漫画家」（「マンガ家になろう」改作）
- (2) ねらい 自分の特徴を知り、よいところを伸ばすとともに、よりよく生きようとする意欲を高める。
- (3) 指導の工夫（本時における重点）
- A：自己との出会い <自分の思いや考えをもつ>
- ・児童の内面に迫るための発問の工夫
 - ・児童の心理的発達段階を考えたワークシートの工夫
- B：他者との出会い <登場人物の生き方に触れる>
- ・児童の実態に合わせた資料の開発
 - ・主人公のよさを見つける過程にそって共感し、心情を考える発問の工夫
- (4) 展 開

	学習活動・主な発問と児童の反応	留意と手だて
導 入	1. 鉄腕アトムについて知っていることを発表する。 ○鉄腕アトムを知っていますか。 ・10万馬力だ。 ・ロボットだ。	・アトムの哀しみについて補足説明する。
展 開 前 段	2. 資料「私は漫画家」を読んで話合う。 ○学校で一日中いじめられているとき、私はどんな気持ちだったでしょう。 ・どうしたらいいんだ。 ・何でぼくばかりいじめられるのだろう。 ◎「何か私にしかできないことをやるのがいい」と考え、漫画をかいているときはどんな気持ちだったでしょう。 ・これでぼくもいじめられなくなるぞ。 ・ただのいじめられっ子じゃないって思ってくれるかな。 ・自分の得意なことをみんなにわかってもらおう。 ○「きっとすばらしい漫画家になれる」と先生に言われたとき、どんな気持ちになったと思いますか。 ・先生も認めてくれた。うれしい。 ・これからがんばって漫画をかいていこう。	・資料の改作(B) ・人と違うことでいじめられた私の気持ちを考えさせる。(A)(B) ・自分の特技を生かし強く生きていこうとする意欲に共感させる。(A)(B) ・自分のよさを認められた喜びに共感させる。(A)(B)
後 段	3. 自分の特徴やよいところを考える。 ○自分の得意なことや、好きなことは、何ですか。また、それを伸ばすために努力していることがありますか。	・3枚のワークシートから自分にあっただものを選んで書く。(A)
終 末	4. 教師の話聞く。 ・人間には弱さも醜さもあるが、だれにでもきつとあるよさや可能性を信じて、大きな夢をもって力強く生きる尊さを手塚治虫のメッセージとして伝える。	・一人一人の児童の内面に眠っている宝に気付かせる。

(5) 考 察

- ・よりよく生きることに焦点化した改作により、児童の考えをねらいにそって深められた。
- ・3枚のワークシートは、自分とじっくり向き合い、自己を見つめる上で有効であった。

Ⅲ 進んで友達とかかわり，互いに認め合う心を育てる指導の工夫 (第3分科会)

1 分科会主題設定の理由

子どもたちはだれもが，自分のよさや可能性を発揮して「よりよく生きたい」と願っている。この願いを実現させていくには、豊かな人間関係を築くことが不可欠である。そのためには自らの心を開き，交流を深め，互いに認め合うことのできる関係をつくらなければならない。しかし，子どもたちの生活を見ていると，心の交流を楽しむゆとりには欠けている。教室の中においても，友達に対して関心はあるけれども，かかわり方が分からない子や，他を受け入れる心の育っていない子も見られる。また，本音で話し合うことを避ける傾向もある。

このように，他とのかかわりに消極的になっている子どもたちを見つめるとき，大切にしていきたいのは，人と人とが心を開いてかかわるための心の広場である。道徳の時間を，「子どもたちが，友達や教師の価値に対する多様な感じ方や考え方に出会い，今までの自分の姿を見つめ直したり，価値観を広げたり，深めたりすることができる場」として考えていきたい。進んで自らの心を開き，相手を受け入れ知ることによって違いを認め，さらには，励まし協力し合う豊かな人間関係を築くことができると考える。

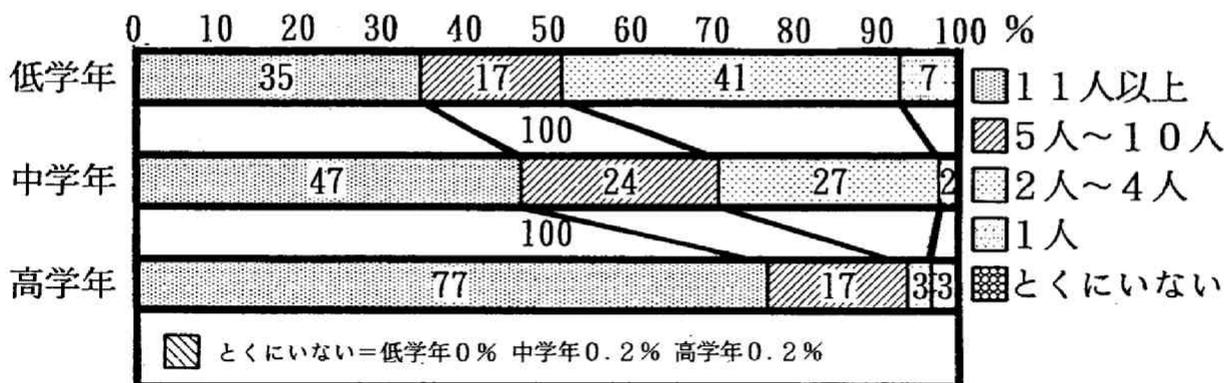
そこで，第3分科会では，テーマを「進んで友達とかかわり，互いに認め合う心を育てる指導の工夫」と設定した。学校生活全体で進んで友達とかかわる場を設定するとともに，道徳の時間の中では互いの思いや考えを交流することのできる指導法を工夫することで，研究主題に迫りたいと考えた。

2 実態調査

- (1) ねらい 今の子どもたちは友達をどのようにとらえ，友達に対してどのようにかかわっているかを調べ，その実態を日常の指導に役立てたいと考えた。
- (2) 方法 選択肢による質問紙法を用い，全学年統一内容にした。調査対象は都内9小学校 1,500名
- (3) 結果と考察

設問1 学校の中に，仲のよい友達は何人ぐらいいますか。ひとつ選んで○をつけてください。

友達の人数調査



学年が上がるにつれ友達が増していくことがわかった。ただ低学年では「一人」または「2～4人」が半数近くいる。さらに多くの子とかかわりをもたせるために教師の働きかけや場の設定が必要と考える。中学年では「11人以上」が半数近くに増えている。その理由としては、学校生活に慣れたことや様々な活動により、児童の交遊関係が広がったことと考えられる。さらに高学年では、「11人以上」が80%近くに増えている。それは委員会・クラブなどの中心として活動することで、より多くの場で友達とかかわるようになるからだと思われる。その反面友達が「1人」の子が高学年でも3%いる。友達とかかわりの少ない子がいることを見逃してはならない。

そこで、学校生活の場で児童が友達とのかかわりをもてるように配慮すると共に誰とでも分け隔てなく接し、認め合う心を育てる必要があると考える。

設問2 あなたにとって、友達とはどういう人ですか。 の中から、
ひとつかふたつ選んでください。

友達とはどういう人ですか



子どもは友達を「よく遊ぶ人」「気の合う人」「いつも話をする人」などにとらえている。その他に含まれる「おもしろい人」「話を聞いてくれる人」「秘密を守る人」「注意してくれる人」を友達と感じている子どもは少ない。だが、その他は学年が上がるごとに増えていく。これは自己意識の高まりと共に様々な考えをもつようになるからだと思われる。

学年別のグラフに目をむけると、低学年では「やさしい人」「たすけてくれる人」の数値が高い。しかし、中学年・高学年になるにつれて「やさしい人」が半減し「気の合う人」やその他が増えている。人間本来のよさである『やさしさ』が高学年になるに従って、優先されていないことが問題であると考え。今日の教育現場においても、不登校やいじめが大きな社会問題となっている。これらの原因の一つにやさしさの欠如が上げられている。「気の合う人」だけでなく、広くいろいろな人に目を向け、その人のよさに気づかせ、一人一人を認め思いやるやさしさを育てていく必要がある。

そこで、道徳授業の中で互いの思いや考えを交流することのできる指導法の工夫をし、自他のよさや違いを認め、児童の価値観を育てていきたい。また、実践意欲が活かされるよう協力し助け合う体験の場を設定するなど、具体的な支援をしていくことが重要であると考え。

3 進んで友達とかかわり、互いに認め合う心を育てる指導の工夫

互いに認め合う心を育てるには、道徳の時間の学習過程の中に、次の3つの視点から指導の工夫を考え、一人一人の児童の学習支援に役立てるようにした。(○は重点)

	①自分の思いや考えをもち相手に伝わるように表現する	②友達の考えを聞き、自分の考えを深める	③深まった思いや考えを意欲につなげる
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・体験を生かした学習課題を設定し、一人一人の思いを想起できるようにする。(実態調査、新聞記事、写真作文、VTR等) ・学習への興味を喚起し、ねらいとする価値について自分なりの思いをもつことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の思いや考えを受容的に受け止めることができるような雰囲気づくりをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいとする価値への方向付けにより、自分なりの思いや考えが意欲につながるようにする。
展 開 前 段	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の考えが出やすい資料を選ぶようにする。 ○資料の内容に浸って考えるため提示の方法を工夫する。(紙芝居、さし絵、ペープサート、パネルシアター、写真、VTR、OHP等) ○発問を吟味し児童の多様な考えを引き出すようにする。 ・児童の実態に合った表現方法を選ぶようにする。(動作化・役割演技・話し合い・絵・ふき出し・手紙・ワークシート等) 	<ul style="list-style-type: none"> ・板書は、発問や友達の発表された考えが確かめられるようにする。 ○話し合い活動や役割演技等を取り入れ互いの考えを受け止めていけるようにする。(ハンドサイン、相互指名、ペア学習、グループ学習、パネルディスカッション、ネームカード等) ○書く活動の後に互いに見合う時間を設け、自他の違いやよさに気付くことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の考えを認める活動を工夫することで自分の考えを深め新たな考えや意欲をもつことができるようにする。
後 段	<ul style="list-style-type: none"> ・考える視点を明確にし、ねらいとする価値について自己を見つめ直すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の考えや体験を知り、共通体験や個々の体験を振り返ることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体験を振り返り、気付いたことを書いたり話したりすることでよりよい友達関係を築いていこうとする意欲を高める。
終 末	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態に応じた終末の工夫により、自分の考えを確かめられるようにする。(説話・作文・詩・歌・手紙カード・VTR等) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の体験を語ることで、児童との信頼関係が深まるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・余韻をもたせた投げかけによって、ねらいとする価値が心に残り、実践意欲につながるようにする。

4 実践事例（第4学年）

(1) 主 題 名 大切な友達（中2-(3) 信頼・友情）

資 料 名 「貝がら」

(2) ね ら い 友達によさに気付き、互いに認め合おうとする態度を養う。

(3) 互いに認め合う心を育てる視点と工夫

①自分の思いや考えをもち、相手に伝わるように表現する

- ・登場人物の提示の工夫により、資料に関心をもつようにする。
- ・自分の思いをもてるよう時間を十分とり、登場人物へ共感し、発表できるようにする。

②友達の考えを聞き、自分の考えをふかめる

- ・中心発問を吟味し、児童の思いを引き出す。
- ・友達との対話を通して、考えを深めることができるようにする。

③深まった思いや考えを、意欲につなげる

- ・ワークシートを使うことにより、自分の考えを明確にする。
- ・グループで話し合う活動を通し、友達を大切にしようという意欲がもてるようにする。

(4) 展 開

	学習活動（主な発問と児童の心の動き）	視点	指 導 上 の 留 意 点
導 入	1.ぼくと中山君の二人を中心にした話であることを知る。	①	・資料に関心をもつよう提示の仕方を工夫する。 ・友達のことを考える意欲をもてるようにする。
展 開 前 段	2.資料「貝がら」を読んで、自分の思いを出し合う。 ・なまっているのをすぐ笑われるから話さなかった。 ・中山くんはとなりのぼくという子に心の中で話しかけている。 ・ぼくが中山君に話しかけたのは、中山君の気持ちを分かったから。 ○中山君は、どうして自分のほうから話し出したのだろう。 ・住んでた所がきれいで思わず言った。 ・住んでいた所を教えたくて。 ・ほめられてうれしかった。 ・ぼくを信用してくれて話した。 ・友達としてみとめてくれた。 ◎貝がらをもらったぼくは、中山君のことをどう思っただろう。	① ② ①	・自分の思いを出させるとともに登場人物へ共感できるようにする。 ・口をきかない中山君へのぼくの思いをおさえる。 ・自分の思いを出す時間をとる。 ・隣どうして話し合う。 ・中山君の気持ちの変化に関心をもつようにする。 ・声の大きさにも気づくようにする。 ・ぼくの立場で考える。

	<ul style="list-style-type: none"> ・中山君の海の話は本当だ。 ・貝がらのお礼をいおう。 ・学校にいったらまた話しかけよう。 ・心の中ではぼくに話しかけていて友達だ。 ・貝がらに元気になってという心をつめてる 	②	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで分からなかった中山君のよさに気づくようにする。
後 段	<p>3. 友達を大切にするために、どのようにしたらよいのか考え、話し合う。</p> <p>○友達を大切にするにはどんなことが必要だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助け合いながらやさしくして悪口やけんかをしない。 ・困っているときは声をかけ励ます。 ・努力が必要。 ・仲良しばかりとしない。 ・自分から遊びにさそう。 ・いいところを見てあげる。 	① ② ③	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを活用する。 ・自分の体験もふまえて考えられるようにする。 ・生活班で話し合い発表する。 ・友達の思いを受け入れ認め合うようにする。
終 末	4. 教師の話聞く。	③	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの生活の中でみられるよさを共感的に話す。 ・友達のよさを認めていこうという意欲をもてるようにする。

(5) 考 察

① 自分の思いや考えをもち、相手に伝わるように表現する手立について

登場人物の絵を上着のポケットから出すことで、資料に興味関心をもたせることができた。資料を読んで自分の思いを出させる場面では、時間を十分にとることで、一人一人の児童に自分の思いや考えを深めさせることができた。また、教師も児童の反応をとらえて授業を進めることができた。

② 友達の考えを聞き、自分の考えを深める手立について

発問1・2では、資料に浸ってよく考えていたので、ぼくの立場だけでなく中山君のよさに気づく意見が多く出た。そこで、ぼくと中山君の思いを理解し合う役割演技を入れることも考えられる。また、自分を振り返る話し合いでは、資料を通して高まった児童の価値観を生かすために、「友達を大切にするにはどんなことが必要だろう」の発問の前に、「友達に認められてうれしかったこと」などを話し合うと、より効果的であったと思われる。

③ 深まった思いや考えを意欲につなげる手立について

ワークシートに記述させた後、生活班のグループで話し合いをしたが、児童は友達の考えをうなずきながら真剣に聞いていた。自分のまわりには主人公と同じようにいろいろな個性をもった友達がいて、相手のよさを理解し認め合うことが友情を育てていくことだと児童は感じていた。この思いを態度で示していけるように、様々な活動の中で認め合い助け合う姿を学級全体で賞賛していきたい。

IV 社会のルールを大切にすることを育てる指導の工夫（第4分科会）

1. 分科会テーマ設定の理由

人は、一人では生きていけない。集団や社会の中で人とかかわりながら生きている。児童は日々生活する学校、家庭、地域社会において、それぞれのルールを大切にすることにより、気持ちよく生活することができる。

社会のルールを守ることは、自分も他人も大切にすることであり、集団や社会を大切にすることでもある。

しかし児童の実態を見ると、みんなのことを考えずに自己中心的な行動をとったり、ルールを押し付けられるものにとらえ、本当の意義や目的に気付いていない児童も多いことが分かった。このような現実の中で児童に社会のルールの意義や必要性を気付かせ、社会のルールを大切にすることを育てることが重要であると考え。それは、人間としての生き方の基礎を形成することであり、よりよく生きる力を育てることになると考える。

そこで、第4分科会では、一人一人の児童が社会のルールを大切にしながら、様々な状況で自ら考え判断し、よりよい生活を築こうとする児童を育てたいと考え、本分科会のテーマを「社会のルールを大切にすることを育てる指導の工夫」と設定した。

2. 児童の実態調査

- (1) 目的 きまりや約束にかかわる児童の意識及び行動の傾向を把握し、資料の選択や指導の工夫に役立てる。
- (2) 方法 調査対象児童は、都内8小学校の児童1～6学年 合計537名

(3) 結果と考察

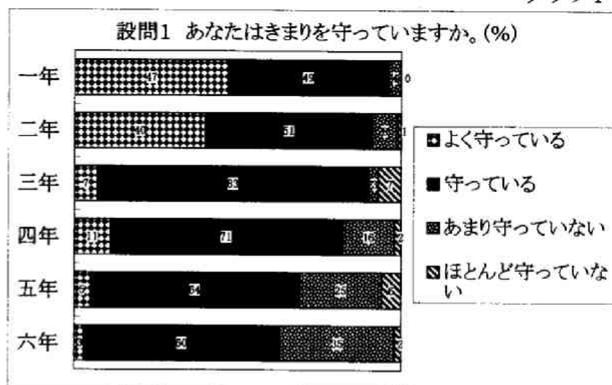
ア. 児童が身近に考えることができるものとして、学校のきまりに対する意識調査から始めた。

設問1より、低学年はよく守っているが、中学年から高学年に進むにつれて、守っている割合が減っていることが分かる。

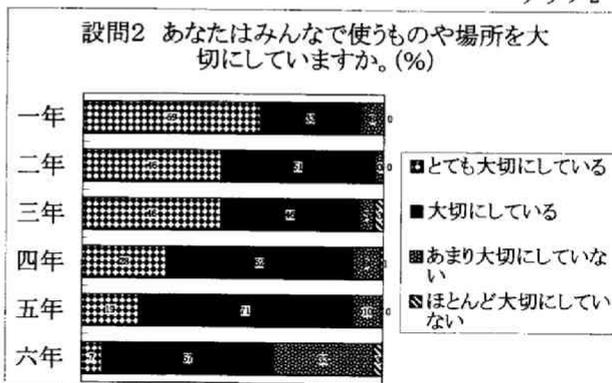
設問2は、公德心にかかわる意識調査である。この結果は、設問1の結果と似ていて、学年が進むにつれて、その意識が低下していることが分かる。

このことより、児童の実態に合った資料を通し、規範意識を高める必要性があると考え。

グラフ1



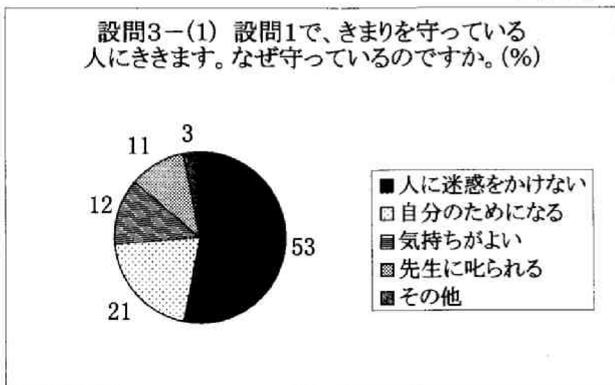
グラフ2



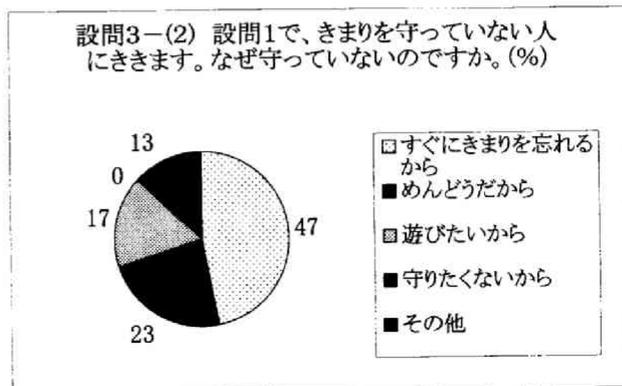
イ. 設問2の結果は学年差はなく、3-(1)の守っている理由として、「人に迷惑をかけない。」が半数を超え、次に「自分のためになる。」と答えた児童が多い。きまりを守っている児童は、きまりの意義や必要性がだいたい分かっていると考えられる。反対に3-(2)より、守っていない理由としては、「きまりをすぐに忘れてしまう。」「めんどうだから」ということが多く、きまりを守っていない児童は、きまりをあまり意識していないことが分かる。

このことより、社会のルールの意義や必要性を理解させ、ルールを意識化することが必要であると考ええる。

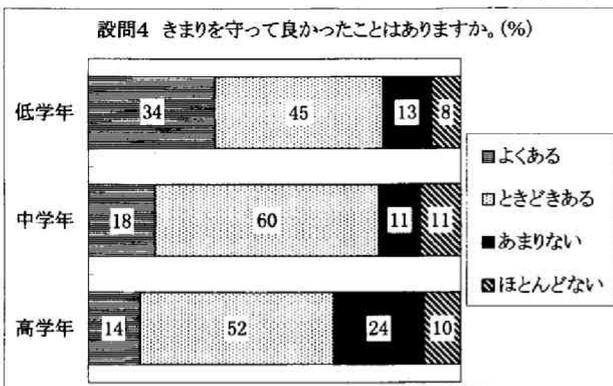
グラフ3



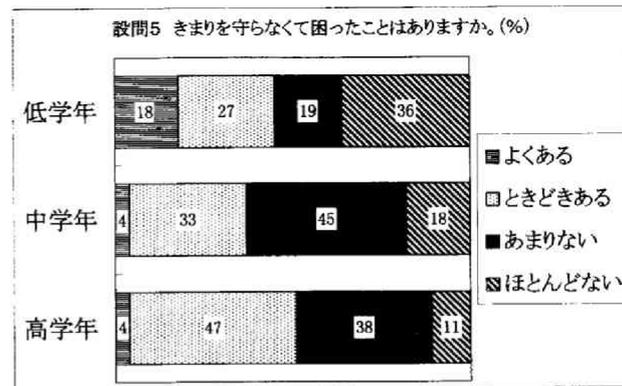
グラフ4



グラフ5



グラフ6



ウ. 設問4より、きまりを守ってよかった経験が「よくある」割合は、低学年、中学年、高学年に進むにつれて、減っていることが分かる。設問1と合わせて考えると、きまりを守ってよかった経験が、きまりを守ろうとする意識につながっていると考えられる。

また設問5より、きまりを守らなくて困ったことは、約半数が経験している。中でも高学年が最も多いことが分かる。高学年はきまりを守らなくて困った経験があるにもかかわらず、守ろうとしない実態がある。

そこで、このような経験を自分の生活を振り返る指導で生かす工夫をして、自分の考えを深めさせたい。

3 社会のルールを大切にすることを育てる指導の工夫

第4分科会では、社会のルールを大切にすることを育てる指導の工夫として次の4点に重点をおき、研究仮説の検証を目指した。

- ① 児童が共感でき、社会のルールの意義や必要性が理解しやすい資料の選択
- ② 児童の心に深く問いかける発問の工夫
- ③ 互いの考えがさらに深められる話し合い活動や動作化、役割演技の工夫
- ④ 他の教科、領域との関連を図り、体験を生かす指導の工夫

他の教育活動	<ul style="list-style-type: none"> 他の教科や領域で「社会のルール」にかかわる体験を重視する。 	
資料選択の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ねらいとする価値への方向付けがしやすい資料を選ぶ。 実態調査に基づき、主題に迫りやすく共感を得られるものを選ぶ。 	
道徳の時間	導入	<ul style="list-style-type: none"> アンケートの結果を提示することなどを通し、価値への方向付けを行う。 資料への興味関心を高める工夫をする。
	展開	<ul style="list-style-type: none"> 児童が「社会のルール」の意義や必要性を考えることができるような発問を工夫する。 互いの考えが、さらに深められるような話し合い活動の工夫をする。(対話・小集団) 役割演技や動作化を工夫して取り入れることにより、登場人物の心情に共感できるようにする。 自分の考えを、さらに深められるようなワークシートの工夫をする。 自分の生活を振り返り、体験を通し社会のルールとどのようにかかわっているか気付かせるように働きかける。
	終末	<ul style="list-style-type: none"> ねらいとする道徳的価値について、自分の考えや思いを広げることができるようにする。(説話、写真、児童の作文、ビデオなど)
	他の教育活動	<ul style="list-style-type: none"> 他の教科や領域において道徳の時間に学習した「社会のルールを大切にすることを育てる」を生かし、様々な状況や環境に応じた実践ができるようにする。

4 実践事例（第1学年）

(1) 主題名 みんなのルール [4-(1) 公德心]

資料名 「おゆうぎかい」

(2) ねらい たくさんの人が集まる場所でのルールを知り、自ら守ろうとする心情を育てる。

(3) 展 開

	学習活動	主 な 発 問	指 導 上 の 留 意 点
導 入	1.お遊戯会の雰囲気を楽しむ。	○好きな動物になり、音楽に合わせて踊りましょう。	・お遊戯をすることで資料に入りやすくさせる。
展 開 前 段	2.資料「おゆうぎかい」の紙芝居を見て、話し合う。	①うさ子は、どんな気持ちで、おゆうぎかいが始まるのを待っていたのでしょうか。 ②さるくんたちを注意したうさ子は、言い返されてどんな気持ちになったのでしょうか。 ③おゆうぎかいが始まったとき、うさ子はどんなことを考えたのでしょうか。	・楽しみにしているおゆうぎかいが始まらなくて困っているうさ子の気持ちに気付かせる。 ・会場係のくまさんや多くの見に来ている動物たちが、迷惑していることにも気付かせる。 ・役割演技を取り入れることで、うさ子の気持ちを考えさせる。 さる — 教師 うさ子 — 児童 ・ワークシートにうさ子の顔を描くことで、うさ子の考えに迫ることができるようにする。 ・他人ばかりでなく、自分のことについても考えさせる。
後 段	3.これまでの生活を振り返りながら考える。	○たくさんの人が集まる場所での約束やきまりを、守れましたか。	・全校朝会や児童集会など、児童にとって身近なことも考えさせる。 ・守れた理由も聞くようにする。
終 末	4.教師の話を聞く。	○教師が、コンサートに会場で経験した話です。	・児童にわかりやすく話をする。

(4) 指導の実際（一部抜粋）

さるくんとうさ子のカードを配り、隣どうしで役割演技を行い、発問②のさるくんたちを注意したうさ子が、言い返された時の気持ちを考えさせた。

その後、教師がさるくんの役になり、代表の児童がうさ子役に行った。

うさ子：「ねえ、はやくすわってよ。」

さるくん：「わかったよ。でもうさいのはぼくたちだけじゃないよ。」

うさ子：「・・・・・・・・・・・・・・・・」

- C1 一人がすわればみんなすわるよ。
- C2 早くみられないよ。
- T 走っている方が楽しいよ。
- C2 だってはじまらないんだもん。
- C3 でも立っているのはおさるさんだけだよ。
- T すわれば騒いでもいいの。
- C3 うるさいから始まらないんだよ。
- T みんなだってうるさいよ。
- C4 すわらないと、おしりぺんされるよ。
- T ③お遊戯会が始まったとき、うさ子はどんなことを考えたでしょう。
まず、うさ子がこの時どんな顔をしていたか描いてください。次に、どんなことを考えたかを書いてください。
- C どうして静かにしてくれないの。
- C うるさいから困るなあ。
- T なにが困るの。
- C 聞こえないから。
- C ルールがあるのに、どうしてそういうことをするのか。
- T ここでのルールってどんなこと。
- C うるさくしないこと。
- C 遊びに来たのなら、お遊戯会に来なければいいのに。
- C でもそれはずるやすみだよ。
- C 静かにしなくてはいけないのに、うまさんは、ポテト食べてる。
- T なぜお遊戯会で静かにしなくてはいけないの。
- C うるさくして、みんなに迷惑をかけるから。
- C ルールだよ。
- お遊戯会の他に、たくさんの人が集まる所を聞き、そこで自分が守ったことと、その理由を聞いた。

(5) 考 察

- ・資料を紙芝居にして読み聞かせた後、黒板に提示したことで、児童は話の流れを振り返ることができた。
- ・役割演技をしたことで授業の山ができ、うさ子の心情に迫るうえで効果があった。
- ・低学年の児童の発達段階から考えると、自分の考えをまとめ、言葉にしてワークシートに書かせることは難しいが、うさ子の表情を描かせてから考えさせたことで、自分の考えをまとめやすくさせた。
- ・他教科、領域との関連で教師が、意識的にルールを取り上げていたことで、今までの生活を振り返りやすくさせ、ルールを大切にしようとする意欲が高まった。

◇ 研究の成果と今後の課題

研究主題「よりよく生きる力を育てる道徳授業」を目指し、道徳の指導内容の四つの視点から分科会を構成し、それぞれに「目指す児童像」・「分科会のテーマ」・「仮説」などを設け、具体的な授業実践を通して研究を進めてきた。その結果、次の点が明らかになった。

1 研究活動全体を通して

社会全体の厳しい変化が子どもたちの生活に大きな影響を与えている。子どもの遊び体験や人間関係、生活のリズムなどが大きく変わってきている。児童一人一人は混迷する社会で、よりよく生きるために、自らよさを求めて思いや願いを実現しようとしている。道徳教育は、児童の思いや願いを実現していかななくてはならない。そのためには、教師は心を開き、常に児童の成長を原点と考え、児童から学ぶことを喜びとし、励みにしていかななくてはならない。また、児童自らが主体的に考え、判断し行動したりできる資質や能力の育成を基調としていくことは大切である。教師と児童との信頼関係が醸成すると、児童同士も、互いのよさや考えを認め合い、励まし合い、尊重し合うといった豊かな人間関係を築くことができるようになる。道徳の時間の指導においては、児童がねらいとする道徳的価値について熱心に考え合い、話し合うことで、一人一人の児童がねらいとする道徳的価値を主体的にとらえられる指導法の工夫をしていくことが重要と考える。

2 各分科会の研究活動を通して

第1分科会では、「生きることの喜びを知り、自他の生命を大切にしようとする心を育てる指導の工夫」を目指して研究を進めてきた。その中で生命尊重という絶対的価値を体得させるに当たっては、感動的な資料の開拓と他教科・領域との関連をもつことが特に大切であるということが分かった。

第2分科会では、「自己のよさに気づき、進んで伸ばそうとする児童」を目指し、研究を進めてきた。自分自身を見つめ自己のよさに気付く指導を工夫する中で、登場人物・友だちや教師の思いに触れる活動は、自己を見つめる場面を効果的に設定することとなり、自分の思いや考えをより深められることが分かった。

第3分科会では、「進んで友だちとかかわり、自他のよさや違いを認め、励まし協力し合う児童」を目指し、研究を進めてきた。その結果、役割演技・話し合い活動・ワークシートの活用を通して互いに交流することのできる指導の工夫が大切であることが分かった。

第4分科会では、「社会のルールを大切にしながら、自ら判断し行動することを通し、よりよい生活を築こうとする児童」を目指し、社会のルールを大切にすることの育成について研究を進めてきた。その結果、道徳の時間を要として他の教科・領域との関連を図りながら、体験を生かすための指導の工夫が大切であることが分かった。

今後の課題としては、道徳の時間で培った価値をいかに実践力へとつなげていくかということになる。そのためには、他教科・領域との関連を図った総合単元的道徳学習などを計画的に実践していく必要があると考える。